
映画館の怪

小野 大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

映画館の怪

【Nコード】

N3278T

【作者名】

小野 大介

【あらすじ】

女友達に映画に誘われた彼でしたが、すっぱかされ、今日も独り淋しく映画鑑賞。そんな彼のこゝろを見つめる視線が……。

(前書き)

映画を観賞するのが映画館。

でも、あなた自身が鑑賞されているかもしれませんよ……。

一緒に映画を見ようと約束したはずなんだけど、どうやら、またすっぱかされたらしい。毎度のことだから、もう慣れてしまった。約束していた相手は友人。彼女は気分屋でマイペース。猫みたいな子だ。

彼女と言ったけど、“僕の”“彼女”と言うわけじゃない。単なる幼なじみだ。

幼なじみと言っても、ドラマだとかマンガとかに出てくるような、あんないいものじゃない。いわゆる、腐れ縁。

彼女は、僕のことなんかなんとも思っちゃいない。異性として見られていないってひしひしとを感じる。僕としては、それがちょっと不満……。

僕は携帯電話を取り出し、いまの時間を確認した。

確認して、受付に時計があるのに気づいた。

上映の時間がもう近い。劇場内に人の流れが出来ている。

つい癖で手に取ってしまった携帯電話。そのまま戻すのもなんだか癪なので、遅刻魔の彼女にメールすることにした。

『もしかして まだ寝てる?』

それだけを打ち、送信

彼女は猫みたいだって言ったけど、眠ったらまるで熊だ。一度眠ったら、冬眠した熊のようになかなか起きやしない。そのくせ、起きたら腹を空かした熊のように凶暴……。

寝不足の状態で起きたときの彼女を思い出しながら、僕は携帯電話をポケットに戻した。思わず、身震いしてしまった。

携帯電話を仕舞ったその手で、別のポケットからチケットを取り出した。つい、二枚も取り出してしまった。もちろん、もう一枚は

彼女のだ。こういつたことがあるので、僕がいつも預かっている。このチケットは買ったものじゃない。彼女がどこからか手に入れたきたものだ。なので、彼女にすっぱかされても、僕は損をしない。ちよつとガツカリはするけど……。

チケットを一枚、ポケットに戻し、受付の横の行列に並んだ。係員の人が僕のチケットを受け取り、素早く半分にちぎった。

座席のほとんどがすでに埋まっていた。トイレに行くときに便利な通路側や、正面から見られる中央付近の席とか、人気のあるところは一つもなかった。彼女を待っていたので、完全に出遅れてしまった。唯一空いているのは、一番後ろの、一番端っこの席だけ……。この映画館もいい加減、席を予約制にすればいいのに、って不満を心の中で呟きながら、僕は、淋しげにちよこんと残されている席に向かった。

一番端っこ。正直、見辛い。とても。

とはいえ、トイレに行きたくなったとき、ここほど便利なところはない。そういう意味では、まだ良い席だ。

座席に腰を下ろそうとすると、劇場内が暗くなった。

(あ、しまった、飲み物……)

もう予告が始まっている。

(買いに走ろうかな？ でも、もう始まりそうだし……やっぱり、諦めよう)

悩んでいるうちに予告が終わってしまった。いよいよ、本編が始まる。

喉は渴いてないし、お腹も空いてない。いざとなったら、鞆の中に入ってる飲みかけのお茶を飲めばいい。それに、飲むとトイレに行きたくなるので、結果オーライだ。

と、そうとでも思わなきゃ、やってられない……。

そのとき、ポケットの中の携帯電話が震えた。急だったので、ちよつと驚いた。

(危ないところだった……！ 電源切り忘れてた……！)

本編が始まる直前。

僕は、光をなるべく遮りながら、携帯電話の画面を覗いた。
遅刻魔の彼女からメールが送られてきていた。

『ごめん！』

だけ。件名もない。

僕はメールの内容に呆れ、溜め息を漏らしながら、そっと電源を切った。

電源を切る際に軽快なメロディが鳴ったものだから、またちょっと驚いてしまった。

僕は携帯電話をポケットに仕舞いつつ、心の中で周りのお客さんに謝罪しつつ、すでに本編が始まっているスクリーンに目を向けた。
今日の映画は大人気アクションのシリーズもの。

前々からとても楽しみにしていた映画だったため、独りで見るのはちょっと淋しいけど、やっぱり楽しい。一番後ろの端だけど、迫力は申し分ない。

初っ端の大迫力シーンから一転、落ち着いた雰囲気映像に切り替わった。

(……………なんか、喉渴いてきたなあ。やっぱり、買っておけば良かった……………)

コーラの味が恋しかった。

(お茶を飲もうかな？ でも、途中でトイレに行きたくなったらいやだし……………)

なんてことを考えていたとき、ふと、最前列の席に目が留まった。

字幕を目で追っていたとき、ふいに映り込み、だから見てしまったんだけど、半分だけ顔を覗かせた子供がこちらをじっと見ている。
(ああ、映画に飽きてしまったんだなあ)

僕は、自分の幼い頃のことを思い出して、思わず苦笑した。

すると、それに気づいたように、子供が顔を引っ込めた。

(お、良いタイミング。もしかして、気づかれたかな？ ……まさか、そんなわけないな)

僕はスクリーンに集中した。 ……すると、視界の下の方でなにか動いた気がした。

自然とそちらに目が入った。

あの子だった。また半分だけ顔を出して、こちらをじっとうかがっている。

(落ち着きのない子だなあ ……まあ、僕も人のことは言えなかった方だけ ……)

その子の視線をちよつとうつとうしく感じながらも、所詮子供のすることなんだからと、しょうがないなど、僕は無視してまたスクリーンに目をやった。

(……あれ ……?)

そのとき、ふとなにか引っかかった。

気のせいだと思うんだけど、いまの子、二列目の席から顔を覗かせていたような ……?

なんとなく気になって、また前の方の席を見た。

すると、前から三列目の、端の座席から子供が顔を覗かせている。あの子だ。さっきの子。

(おいおい、誰も注意しないのか？ 親はなにしているんだ？) すると、子供が顔を引っ込めた。

(お、さすがに注意されたかな?)

と思えば、四列目の座席から子供の顔がぬつと現れた。

(え ……?)

そのとき、僕は気づいた。なにかおかしい。

子供はまた顔を引っ込めた。そして、五列目の席から顔を覗かせた。

(やっぱりおかしい ……早過ぎる。あんなに早く移動出来るはずがない ……！ それに、どうして誰も注意しないんだ ……?)

六列目……七列目……。

悪寒が走った。

（あれ、もしかして、人間じゃない……！？）

八列目……九列目……。

気づけば、子供から目が離せなくなっていた。

（身体が……腕が……！？ 椅子に張り付いて……！？）

十列目……十一列目……。

もう、すぐそこまで来ている。

十二列目……十三列目……。

すぐ目の前の座席から、子供がぬつと顔を覗かせた。

（透けてるっ！？）

前列の席に座っている人の頭が、子供の顔の向こうに透けて見えている。

子供は僕のことをじつと見ている。見つめている。

その上半分の顔には表情というものがない。

ただただ、覗き込むように、じつと僕のことを眺めている。

（怖い……怖いっ！ あっちにいけっ！ あっちにいつてくれえっ！）

どうしても目を瞑ることが出来ず、顔を逸らすことも出来ない。

僕は、僕のことをただ覗き込むばかりの子供に向かって、必死にそう願った。願うことしか出来なかった。

すると、子供の頭がすつと消えた。

(あつ、いなくなってくれた!? …… あれ、でも、身体がまだ動かな)
そう思ったとき、座席の下から 僕の足の間から、その子の頭がぬつと現れた。

にやあ、と笑った顔がすぐに目の前に。

張り付きそうな位置から僕のことを見つめるその顔には、首から下が無かった……。

「ウワアッ!」

あまりの恐さに、僕は思わず大声を出してしまった。
すると、急に身体が動いた。

「キャアッ!」

「ヒイツ!」

慌てて立ち上がろうとしたとき、周りで一斉に悲鳴が上がった。

その声に、僕の大声は一瞬にして掻き消された。

「えっ!?!」

大勢の人の悲鳴に驚いて、僕が身体を硬直させたそのときだ、周りの席に座る人たちが一斉に立ち上がり、後ろにある出口へと押し寄せた。

我先にと、皆、無理やり劇場から出て行った。

「……………」

咄嗟に動けなかった僕一人だけが取り残された。

「ヒイツ!」

僕は思い出したように悲鳴を上げ、皆に大きく出遅れながらも、出口に向かった。途中転んでしまっ、這うようにして外に出た。
受付のあるホールに出てみれば、僕より先に飛び出して行った大勢の人たちが、係員の人たちを取り囲んでいた。皆、その顔はひどく青ざめていた。

皆、口々に、

「くっ、首だけの子供が……! 首だけの子供が!」

と、係員の人たちに詰め寄っていた。

どつちら、アレが見えていたのは僕だけじゃなかった……。

(後書き)

いかかでしたか？ 楽しんでいただけましたら、幸いです。

様々な方のご意見をうかがいたいので、評価や感想を頂けましたら助かります。あと、とっても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3278/>

映画館の怪

2011年9月8日03時11分発行